２４／１２月

S 37 年　産経新聞に掲載された
県商の「先輩・後輩」の記事を紹介します ⑤

今回は「**思いがけぬ校舎火災**」です

高商昇格　ついに実現せず

「先輩・後輩」の題字は 生田英一校長です

先輩後輩

県立神戸商業高校 ⑤

題字　生田英一校長

現代への歩み

校旗おしくも焼失

○…校旗もようやく三十九年にきまった。製作費は卒業生の寄付でまかなわれ五月二十七日の日本海海戦記念日に盛大な開旗式が行なわれた。デザインは楯を交錯して、これに神戸の頭文字を配し、校章の「商」の字をあらわしたりっぱなもの。しかし当時の校旗は大正六年十二月の楠町校舎全焼のさい、焼けてしまった。

早かった火の回り

○…大正三年、楠町校舎も老朽化してきたので、新築移転説がもちあがり、翌年の県会で建設費十一万千八百七十円の予算を可決した。候補地は西尻池にきまったものの、肝心の土地問題でデッドロックにのしあがった。そのうえ第一次大戦が起こり物価も高くなり、ついに新築計画は日の目をみずにお流れ。二年後の六年十二月四日、思いがけない火難に見舞われ、校舎の大部分を焼失するという大事件が起こった。

思いがけぬ校舎火災

高商昇格 ついに実現せず

㊤猛火につつまれた楠町校舎
㊦原田校舎の正面

長　延連氏

菊水吉之助氏

三島正雄氏

在校生だった三島正雄（県獣医理事長、大正八年卒）は、当時の模様について「インドの夕ゴール翁の講演会が大倉山であり、講演に耳を傾けているさい中だった。ふと真下をみると、母校から真っ赤なほのおが校舎を包んでいた。すぐかけつけていったが、火の回りが早く、手のつけようがなかった。小使いさんはウロウロしていた」と語っている。古林嵩楽（もと神戸大学長、現同教授、大正十年卒）も「あさ、明石から通学してみると、学校がみえず、びっくりした」と学生時代の思い出をのべており、県商にとってはかつてない大きな事件だった。

木造校舎ひとなめ

○…学校の記録によると、午後五時二十分ごろ、本館二階東端の二年一組教室付近から出火、またたく間に木造二階の建て物をひとなめにした。宿直の古賀文一郎教員がご真影を持ち出したたけで、他の重要書類は持ち出すヒマもなく、焼けてしまった。原因はいまでもわかっていない。このようないきさつがあって、武庫郡西灘村原田に新しい校舎が完成、大正八年に東神戸へ移った。昭和七年までの十八年間は、まったく平穏な歳月だった。しかしこの間、高商昇格運動をとりあげぬわけにはいかない。

○…神戸港は、年とともに発展してゆき、海外的にも大きくクローズアップされてきた。大正十一年、県立高等商業学校の設立の重要性が、県民の間にも認識されはじめ、官立神戸高商の商大昇格問題が起こるにつれて、ますますその機運が盛り上がった。県商同窓会でも、五十周年記念事業のひとつとして、昇格問題をとりあげ、楢崎寿衛、谷口茂雄、船井長吉（いずれも故人）らが中心となって、県当局、商工会議所など各方面に運動をはじめた。

県は高商新設へ

○…一方、県当局も①別に県立高商を新設する②甲種商業五年、高等商業三年の併置③県商を昇格して、別に甲種商業学校をつくる——の三案について協議した結果、当時の長延連知事は「同窓会の要求を入れるから、高商設立費として三十六万円を調達せよ」と要求した。

○…さっそく寄付集めにかかったが、たまたま関東大震災が起こり、この運動も一時ストップ。そのご、各方面をかけずり回ったが、わずか十万円にも達せず、募金運動は行き悩み状態。そして県の意見は高商新設にかわり、ついに昇格運動は実現しなかった。（登場人物の敬称を略しました）

校舎焼失の思い出　菊水センベイ総本店経営、菊水吉之助氏（六三）

家の二階の窓から楠町の校舎が燃えているのを見、楠公さん前を手押しポンプをかついでかけて行く若い人たちのあとを追って、いちもくさんに母校へ走って行った。そのときにはもう火の手は伝統ある校舎をすっかり包んでいた。

全校生はもちろん、先輩もかけつけ、泣きながら焼けあとを整理したことを思い出す。まもなく先輩たちの協力もあって葺合区上筒井に木造平屋建てバラックの仮校舎ができた。焼失校舎も古いガタガタのものだったが仮校舎はそれ以上にひどかった。夏は涼しかったが、冬はスキ間風が遠慮なく通り抜け生徒は手をこすり、足を床にたたきつけながら、寒さに耐えて勉強にはげんだものだ。

泣いて焼け跡整理

校舎が焼失したとき〝名門に傷がついた〟と無しょうに腹がたった。それと同時に焼失校舎への愛着がつのり、寂しさに耐えきれなくなり、楠町の焼け跡へ何度も足を運んだことをまざまざと思い出す。（大正七年、三十六回卒、現在、神戸市生田区多聞通り三に居住）

歴史資料委員会